

基町／相生通り（通称「原爆スラム」）調査を回想する〈後編〉

石丸紀興 千葉桂司 矢野正和 山下和也

はじめに

かつて太田川（本川）に沿って、くの字型に伸びた「基町／相生通り（通称『原爆スラム』）」と呼ばれる街が存在した。「原爆」に起因し「スラム」と刻印され、戦後の社会経済の多くの課題を背負った街は、基町地区再開発事業により撤去された。

私たちは、この「基町／相生通り（通称『原爆スラム』）」で、撤去直前の昭和 45（1970）年夏、実態調査を行った。それから 9 年を経た再開発後の昭和 54（1979）年、かつての居住者に対して追跡調査を行った⁶。

この報告は、これらの調査を現時点で振り返り、消滅した街の意味を改めて考察し、今日の思いを述べるものである。なお、当初『広島市公文書館紀要第 29 号』（平成 28 年 6 月発行）に全内容を掲載する予定であったが、ボリュームが膨大となったため、前・後編として分けることとなった。

前編では、昭和 45 年に行った最初の調査のうち、戸別に行った家屋実測調査、居住者へのアンケート・ヒアリング調査から 17 事例を紹介し、そこから読みとれた住民の生活、心情、課題について記述した。後編では、その調査で行ったコミュニティごとの寄り合いインタビューから、この街やコミュニティはどう形成されたかについて記述し、続いて再開発後に行った追跡調査で分かった地区住民の移転行動や、住み替え後の評価などについて記述する。



写真 6 三篠橋南側河岸の相生通りと基町の街並み（昭和 44 年 6 月 14 日撮影）
最初の調査（昭和 45 年夏～秋）のほぼ一年前の地区の様子。

5 街はこうしてつくられた (寄り合いインタビューの記録から)

昭和 45 (1970) 年夏の調査中に、私たちは 2 度、地区の北と南それぞれで、ここに長く居住する数人の方々に集まってもらい、この相生通りの街がどのようにしてでき上がっていったのか、その過程の証言記録を採ることにした。以下は、「戦後すぐの三篠橋付近の状況」をインタビューから抜粋したものである。その記録をもとに街がつくられていく様子を図化したのが図 14 である⁷。図 15 は同じ地区の家屋平面配置図である。

その (インタビューの) 夜、蒸し暑いとはいっても太田川からのかすかな風を受けながら、私たちは一升瓶と重たいテープレコーダーを担いで、数人の方が集まってくれた K さんの家を訪ねた。

(K さん宅は、図 14 の北から 14、15 軒目の黒塗りの住宅。相生通り上に「K さん宅」と表示)

■三篠橋付近 (の河川敷) は、昭和 24 年頃までに埋まった

Q: では、24 ~ 25 年までには、三篠橋から K さんの家までは殆んど家が建ってたんですか。

- ・ええ、建っとったです。うちはスポーツ博覧会⁸の前で、たしか昭和 24 年じゃった。隣の I さん宅は、うちより半年早かったな。
- ・三篠橋付近からずっと建ってきて、(南は) 相生橋の方からもずっと建ってきたんです。それからこっちへタッタッタと 2 ~ 3 年の内に建ったんですよ。
- ・あそこの釣り道具屋さんが、23 年に出とった出店を小屋囲いしてから、ちょっと何か店してね、釣り道具屋に変わったんです。
- ・一番最初に建ったのがブリキ屋だったんですよ、角のところ。でもちょっとの間だけ。ブリキ屋を建てたけど上手いかなで、店が変わって (今が) 3 代目になるんよ。
- ・それから M さんがその隣へ小屋がけして、店開いて飲料水を売りよちゃった。それから、一番最初、家がなかった時にはね、今、三篠の小学校の先生しよってですが、その人が「動く家」ですよ⁹、屋台店のようなのでパンとか何とかやりよちゃったですよ、21、22 年頃にね。

■復興局¹⁰ から頼まれた

Q: K さんがここに入られた時 (昭和 24 年頃)、この辺りはまだ空き地だったんですか。

- ・ここは畑や空地が多かったですね。この C さんの家や隣の家がほとんど同じ頃 (に建った)。
- ・それから川側の方に家が建っていった。あれが何年ごろじゃったかの？
- ・ (奥さん) やっぱり、うちの子が生まれる 26 ~ 27 年頃ですよ。
- ・うちらがおって、(この辺に他の家が建つとき) やかましく言われたんじゃ。復興局から (建てさせんように) 管理してくれと言われて、管理してあげますと言うのは言うとったんじゃが、ワシに「建てな」という権利はないですから。皆んな困っとるんじゃけ、行くところがないんじゃけえね。
- ・建てたらいけんとうちの方から言うでしょう。そしたら日曜は役所が休みでしょう、土曜の夜から日曜にかけて、いつの間にか家が建っとる。ありゃ！あそこにも建っとるということで、どうしようもなかった。

■家が建ち、道ができる

Q: 今ある道は、ほぼ大体の形はあったんですか、作られた訳ですか。全然知らん人がポツンと建てたというようなことはないですか。

- ・家を建てるたびに道が付いてしもうたんですよ。
- ・そりゃ初っ端の人はポツンと建てますよ。でも知った人がおれば、やっぱり他の所より「あんた、ここにおるんか、ほんじゃワシも隣へ」というか、「ええか、ここへ建てても」「ええ悪い言うても、あんたも困っとるじゃろう」ということになる。隣へ建てるで自然にこう足跡がつく。奥に建てれば自然に一

本道ができる。そしたら、こう行ったほうが良いとか、こっちを回って行ったほうが良からうか、というようなことで自然に道が付くわけよね。

- ・そりゃ（決めるのは）やっぱり初めはお互いに話し合いせにゃ。

■生活用水、共同井戸と水道の話し

Q：家を建てたりする場合には、（井戸や水道は）あったんですか。

- ・いや、無いです。回りは野原じゃった。この辺は電鉄へ行きよっちゃったUさんがおって、その裏にあったポンプを皆なが使いよったです。
- ・今の共同ポンプは1つのグループになっとってね。当時一本掘るのに4,500～5,000円、利用する者で要っただけのものを出し合ってやとったよ。

Q：だいたいどの辺りの人が使っていたんですか。

- ・この近所は全部です。昭和23～24年頃までは、Iさんが豆腐屋するために引いた水道しか無くて、ワシらはそこ（三篠橋付近）の水道水をここから担いで（運んで）ね。担ぐのがやれんかった。それでその後、昭和38年頃にKさんが水道を引いたんです。
- ・昭和39年かの、ようよう役所がやってくれたんよ。課長さんらが目をつむってくれたんよ。

Q：南の方では、川の水を飲料水に使っていたこともあると聞いたんですが、この辺りではそんな事はなかったんですかね。

- ・そりゃ一番初っ端はねえ。ここらは幸いに、あの井戸ポンプが早くからあって、ええ水が出よったんよ。潮が引いたときなんか、ものすごい水量が出よったんです。
- ・でもまあ家が増えるにしたがって、具合が悪いからいうて、ポンプ井戸を掘ったですよ。
- ・ところが、たいそうの塩が来るもんで、どうでもこりゃいけんわいということで、結局水道を使うようになったんよ。

■土地のこと

Q：土地（自分の敷地）は、その家の形だけが暗黙のような権利があるのか、例えば垣根があるとすると、そういう囲まれれば利用する権利といったものがあるのか。

- ・その一画を使っていればね、一応入れないですよ。

Q：空いている所は、誰の所有（権利）でもないのですね。空いていれば、そっちに延ばそう（増築）と思えば延ばせるんですかね。

- ・そう、それは国家が所有してるんです。延ばせるよ。

■町内会・子ども会のこと

Q：町内会の組織はいつ頃できて、どうでしたか。

- ・6年くらい前（昭和38、39年頃）からかの。町内会には殆んどは入っとるが、中にはアパートの住人のように入っとらんのもおるよ。1組は、だいたい8～9軒で、中には13～15軒ぐらいの組もありますよ。全部で町内会は8組（地区）あります。100戸なんぼありました。
- ・それから、防火委員が7人くらい。衛生部長が1人で、衛生委員はたくさんおって、各組1人で8人います。ほかに防犯委員は1人。

Q：町内会の行事や仕事を教えてください。

- ・この会費（70円/月・戸）は、お祭りの行事のしめ縄張ったり、敬老の日や赤い羽根共同募金にお金を出すけど、お金が少なくて出来るだけ寄付を出さんようにした。

- ・第 6 基町子ども会は小中学生まで。できて 8 年ぐらいです。行事は、夏の海水浴や旅行・クリスマスやったり、卒業生・新入生の歓送迎会も、野球大会もやる。
- ・仕事は、主に夏の蚊にくわれる対策や、うじ虫が湧くでしょう、だからお便所に消毒薬を撒くとかね。防犯灯もある。街灯ができたのは町内会が頑張ったんよ。

6 そこはどんな街であったか

こうして、この街に住んでいた人たちの生々しい声と、声をかけながら自然に街が出来上がっていく様子を伝えるヒヤリングから、私たちが読み解いたことは何であったかを述べてみたい。

なお、ここで調査結果を詳細に報告する紙面の余裕はないため、詳細に興味を持たれた方は、ぜひ参考文献の資料と図面をお読みいただきたい。

1) 基町の土地利用の変遷と復興事業が呼び寄せた街

広島城の外堀と太田川（本川）に囲まれ、城下町広島を中心地区であった基町地区は、明治から戦前までは城を中心にして軍の施設用地となり、「軍都」の中核地区として利用された。戦後は広大な国有地となり、戦災復興計画で大都市計画公園として計画されたが、応急的な住宅建設用地や官公庁の施設用途への割譲などにより、諸機能を並存する地区となった¹¹。こうして、国有地の西端で繋がる太田川沿いの河川敷の空地が、人目の付きにくい格好の「住宅地」として利用されることになったのである。

被爆により家を失った人、疎開先から復帰する引揚者、生活の糧を求めて流入する新住民、あるいは戦災復興計画による土地区画整理事業によって、中心部の主要な施設（平和公園・平和大通りや河川緑地など）が生まれる中で立ち退きにあい、行き場を無くした市民が、行き着く先として目に留まったのが相生通り地区、後の「原爆スラム」であった¹²。

2) 「不法占拠」、敷地割りからの開放がうみだす「共有空間」

消えたその街には我々が学ぶべき、確かな知恵もあった。

この街の空間構造を規定している重要な要素が、「不法占拠」であることを私たちは間もなく発見した。ここで言う「不法占拠」の意味は、単なる不法建築等による占有ではなく、「拘束や管理からの自由を求め、生きて棲むための、共有化しうる空間を獲得する権利の主張であり、その積極的行動」（参考文献 2・編集後記）であったことに気付く。

空間的にいえば、敷地所有権のない、つまり敷地境界がない街であっても、不法に占拠しても尚、秩序ある人間的空間を形成せしめていたことである。一般市街地には存在しない、この「敷地から開放」された時、人々はどのようにして、何を手がかりに「いえ」と「まち」をつくるのか、その空間的秩序を生み出す原理が、ここにあった。

つまり、この街を南北に貫く相生通りの「みち」そのものが、街の人々によって生活空間の軸として共有化され、単に車のための道路という機能のかわりに、小さな子どもから老人に至る幅広い年代にわたって、暮らしの舞台として活用されて

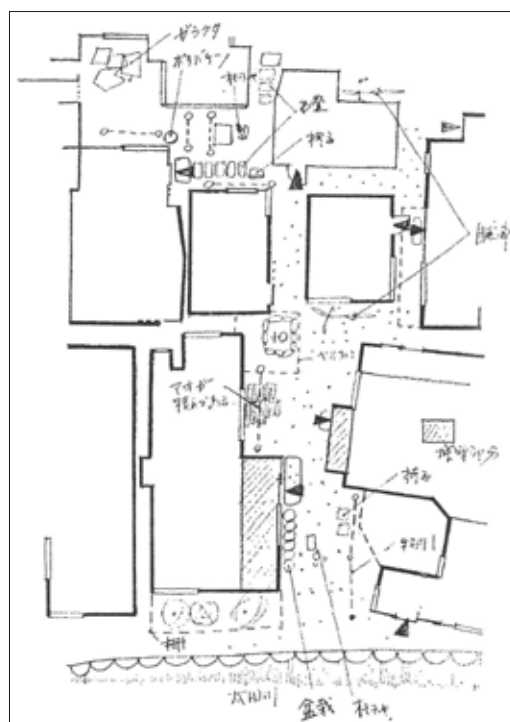


図 16 中庭的な共有空間

いたのである。さらに、この土手「みち」から段差を利用して伸びる「枝みち」は、風道にもなる路地となっ

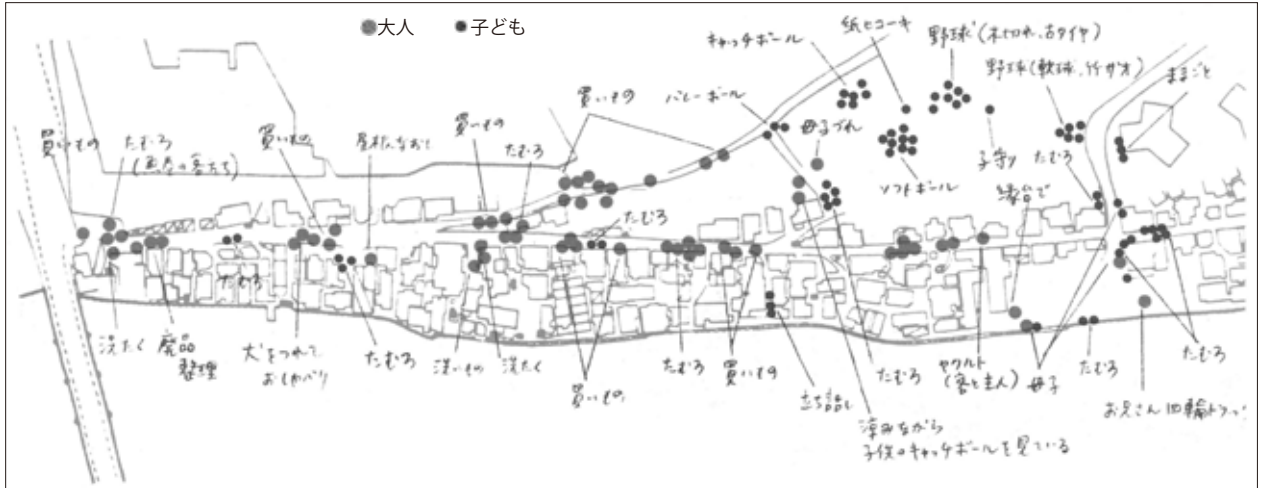


図17 午後4時～4時半の行動調査事例（三篠橋付近）

て住戸間の「すき間」につながり、狭い住戸機能を補完する空間として張り巡らされる。(図16)

「みち」に面する共同水道での洗濯・木かげの小魚露天商のおばあさんと主婦たち・たむろしておしゃべり・毬つきや三輪車で遊ぶ子どもたち・椅子に腰かけての夕涼みなど、子どもたちの格好の遊び場となる路地や空き地と共に、これが近隣生活を円滑化させる「共有空間」の場として生活領域化されていたのだ。(図17)¹³

こうした構成原理によって出来上がった街の姿は、これからの街や都市に獲得されるべき人間のための空間のあり様を示唆してはいないだろうか。私たちが学んだ都市計画論にはなかったこのことが、この後、長く私たちが都市や建築、住宅に立ち向かう原点に繋がったと考える。

3) 基町／相生通りはスラムであったか

「スラム」には国連による定義がある。「人口の過密や不衛生な状態に加えて、公共施設が十分でなく、これらのために住民の健康や安全や道徳などが危険な状態におかれているような建物の集団地区」とある。

また、大阪市立大学・大藪教授（当時）は、相生地区の調査レポート¹⁴の中で、スラムの形成過程と社会的機能の段階を次の4つに分けられるとしている。すなわち、①移民・移住者の避難所的・腰かけ場の機能の段階 ②不適応者・落伍者・転落者の流木たまり場の機能の段階 ③逸脱的行為者の隠れ場の機能の段階 ④社会的移動者の社会濾過的機能の段階、である。そして当地区の場合、第1段階が原爆被爆時における被爆者たちの避難所的・腰かけ場の機能の段階であり、その後戦災復興・経済成長が進むにつれて第4段階が登場するとしている。

当地区がスラムであるかどうかの規定については様々な考え方があろうが、少なくとも私たちの調査では、家屋の不良度、衛生上の問題や家族構成、生業種類の一部に若干の偏りがみられるものの、②と③は確認していない。ここではスラムと呼ぶには相応しくない大衆消費財に囲まれた、「市井の暮らし」が展開されていた。町内会や子ども会が活動し、赤十字の募金をし、衛生・防火・防犯に住民自ら組織的に取り組んでいた街でもあった。こうした街をスラムとは呼べない。にも関わらずスラムと呼ばれた社会的偏見を招いた原因は、戦後約20年を経てなお、不法占拠による周囲と際立った物的外見から受ける印象によるところが大きかったと推測される。

この街はいったい何であったろうか。

被爆後の焼け跡では多くの市民がバラックで雨露をしのいだ。相生のこの街だけがそのままの姿で最後まで残った。そこにも広島市民は生きていた。被爆の惨状の中から立ち上がり、戦災復興や高度経済成長といった社会変動の荒波の中で生き続けた街。貧困に加えて国籍差別や被爆による様々な困難、さらに土地の不法占拠

からくる一種の負い目や居住環境など、多くの問題を抱きかかえ、あえいできた街であったろう。それは被爆都市「ヒロシマ」・戦後都市「広島」にとって、忘れられてはならない都市の歴史的断面を赤裸々に訴え続けてきた街であったといえよう。

7 その人たちは何処へ行ったか

昭和 54（1979）年、元相生通り居住者の 10 年後を追うもう一つの調査

実態調査からほぼ 10 年、高層アパートの建設とともに、ある者はそこに移り、ある者は基町を去った。今、相生通りに暮らした人々はどこに行ったのか。どのような事情や心情のもとに以後の行動を選択したのか。そして今どのような生活を始めており、以前の生活をどう感じているのか…。消えた街の住人の事情をぜひ追跡してみようというのがこの調査であった。

再開発する側とされる側の事情は重なり合っている部分もあれば断絶もある。再開発する側の論理はこれまで多く発表されてきた。だが再開発される側の事情にも重要な歴史の一コマがある。広島歴史の中からその一コマを落としてはならない。調査におもむく我々の中にそのような思いがあった。

追跡調査の問題意識は、再開発された側からの視点に立ち、「元相生通り地区住民が選択した移転の状況と、入居後 10 年を経て、高層アパートなどでの暮らしをどう評価しているか、の実態を追跡しておくこと」であり、そのことは我々の責務と考えた。そして「彼らにとって基町地区再開発事業の初期の目的が、どのように達成されているか」を検証することであった。

今、追跡調査を振り返ると、およそ 10 年前（1970 年）の実態調査を覚えている人が大半であったこと、そのこともあってか住戸に招き入れてくれた世帯も多く、親切にしてもらったことが記憶に甦る。そして、調査を終えて帰路につこうとしたとき、高層アパートから二葉山方向を見ると、これまで見たことのないような大きな満月が昇っており、高層建築とのコントラストの中で異次元の美しさを感じたことを思い出した。

1) 相生通り地区住民の移転行動

把握できた 1,304 世帯（1976 年 8 月 15 日現在：追跡調査時（1979 年）に把握できた移転行動のデータの時点）の半数近く（619 世帯、47%）が県改良住宅（長寿園）、144 世帯（11%）が市改良住宅（基町）、89 世帯（7%）が公営住宅（広島市内：基町を含む）、363 世帯（28%）が地区外（広島市内の公営住宅を除く）となり、この時点では、89 世帯（7%）がまだ相生通り地区に残留していた。

このうち追跡調査で回答を得た地区内（基町・長寿園地区）移転世帯（58 世帯：県改良住宅

44、市改良住宅 12、地区内公営住宅 2）の再開発事業への期待としては、「災害（火災等）からの解放」「住戸・設備が整うこと」「環境が良くなること」が、一方、不安としては、「高層への不安」「新しいまちへの適応の不安」「家賃への不安」が上位となる。

追跡調査で回答を得た地区外移転世帯の地区外へ出た理由としては、「相生地区（基町）から出たかった」という世帯がある一方で、「商売や仕事上、出ざるを得なかった」ケースもあった（次頁「移転と職業」を参照）。また、県による地区外の公営住宅の紹介もあった。

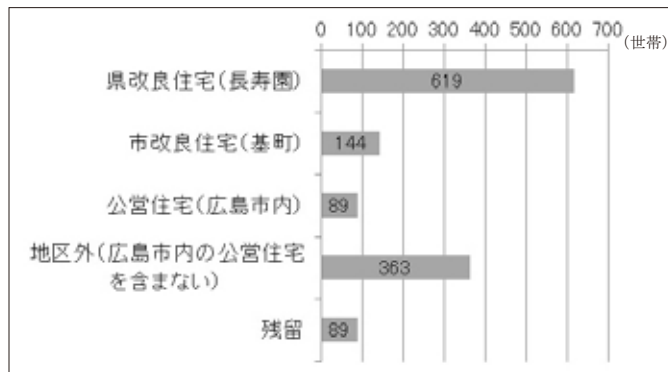


図 18 相生地区住民の移転先

※残留：1976 年 8 月 15 日現在で相生地区に居住していた世帯

2) どのような結果を得たか

■物的側面からみた評価（基町・長寿園地区）

再開発事業の評価を物的側面からみると、地区内（基町・長寿園地区）移転世帯の調査からは、「住宅・設備が整った」「災害（火災等）の心配がなくなった」「衛生的になった」「環境が良くなった」が上位を占め、再開発事業への期待が達成できたと捉えることができる。ただし、その後、高層アパートにおける火災の発生などがあり、防災対策が求められることになる。

一方、マイナス面・課題としては、住戸の狭さ、災害時の避難の不安、エレベーターの防犯上の不安、単身高齢者の上層階居住（1Kプラン）、駐車場不足（ピロティの駐車場化）などがあげられる。また、屋上庭園については、死角となることも起因し、完成間もなく外部からの自殺者、青少年の健全育成面などの問題が生じ、当初は開放されていたものが、扉と鍵による管理となった。

このほか、基町と長寿園地区は、一体で進められた再開発事業であり、景観的には一連の住宅群となっているが、長寿園地区については、コア、集会所、屋上庭園、店舗スペース、遊び場などの配置・整備に基町地区ほどの計画性がみられない。また、管理方法も長寿園地区（県）は委託方式であり、直営方式の基町地区（市）と比べ、評価が低くなっていた。

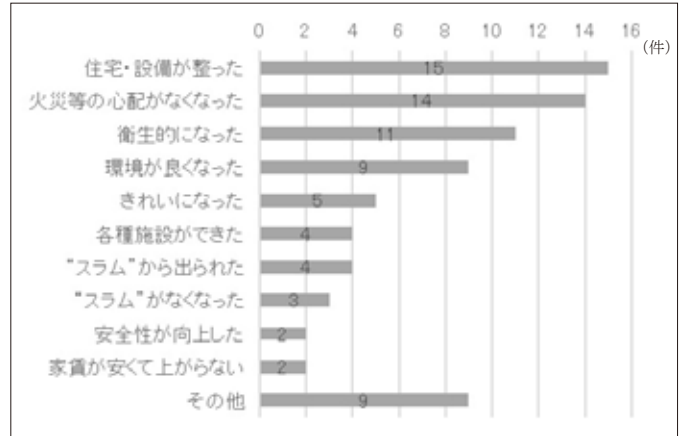


図 19 再開発事業のプラス評価

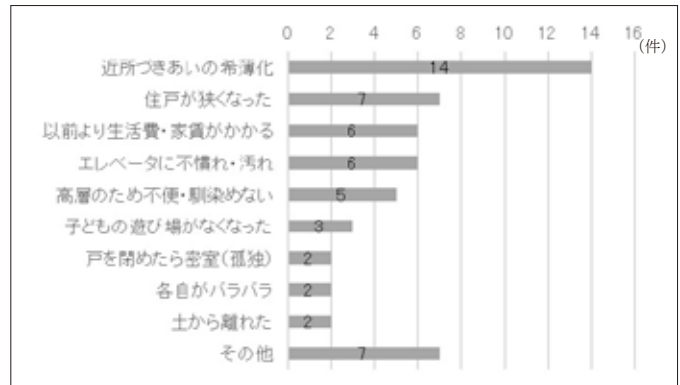


図 20 再開発事業のマイナス評価

■社会的側面からみた評価（基町・長寿園地区）

移転当初から、高齢化や高齢者の独居化、それに伴う行事運営の制約が指摘されていた。

住戸・空間構成と関連づけながら、社会的側面から再開発事業の評価をみると、地区内（基町・長寿園地区）移転世帯の調査からは、「近所づきあいの希薄化」が突出しており、整備された住戸と鍵による防犯・安心の確保の一方で、コミュニティの弱体化が進みつつあることを示していた。

ある独居の高齢女性は、調査に訪れた私に多くのことを語りかけ、私は話し相手となりながら調査を進めた。そして、彼女は「外に出ることは希で、一日中、部屋から外を眺めている」と語っていた。高層アパートの窓々からは、無数の孤独な視線が注がれていることに気づいた思いであった。

また、外国籍（在日韓国・朝鮮）の人は、日本国籍の人と比べ、住戸・環境、近所づきあいなどの評価が低くなっていた。

■移転と職業

相生通り地区に暮らしていた世帯の3割近くが、地区外に移転しており、その中には地区外に新たな生活を求めて積極的に転出していったケースがある一方で、廃品回収業や板金業など職業の関係で地区内移転ができ

なかったケースもある。また、作業所（縫製業）の確保が住戸内では難しい、店舗は確保できるが職住分離で不便になるなどで、地区外に移転せざるを得なかったケースもあった。

昭和 44（1969）年から始まった約 10 年間にも及ぶ基町再開発事業によって、この地区の改善はなされた。この事業の大きな目標・理念は「広島戦後を終わらせること」であり、「地区住民の福祉の向上と、新都市への挑戦」であった。

一方、当時の相生通り地区に住む人々に共通した不安は、「火災、衛生面」などの問題に加え、「移転（強制撤去）」であった。これに関する再開発事業の評価、そして基町アパートなどの捉え方を、相生通り地区に住んでいた K さんの言葉「徴用で日本に来て、様々なところに移り住んで相生通りにたどり着いた。今は“鳩小屋”に住んでいるが、だれからも追い出されることがなくなった」が象徴的に表している。基町・長寿園地区（住宅）は、元相生通り地区住民にとって、また、広島戦災復興の歴史において、戦前を含め時代を語る“終の棲家”でもある。

【追記：追跡調査後の状況】

追跡調査の後における状況の変化として、住戸の狭さ、コミュニティの変化、店舗の状況、及び最近の活性化に向けた取組について追記したい。

住戸の狭さについては、当初より指摘されていたが、現在、基町住宅再整備事業が進行中であり、2 戸 1 化（従前の 2 住戸を 1 住戸に改修）、3 戸 2 化（従前の 3 住戸を 2 住戸に改修）などが進んでいる。

コミュニティの変化については、1990 年代ごろから中国からの居住者が増加しており、コミュニティづくりなどの新たな課題が生じている一方で、基町小学校の児童数の確保と小学校の維持に寄与している面もある。また、高齢化率が広島市平均を大きく超えて進んでいる。

基町住宅地区には、基町ショッピングセンターをはじめ、各所に店舗等が確保されているが、空き店舗化、倉庫化が進んでおり、その活性化が求められている。

こうした状況を踏まえ、広島市は平成 25 年 7 月に「基町住宅地区活性化計画」を策定し、この計画の取組として、若年世帯や学生の入居を進めるとともに、広島市立大学と中区との連携による基町プロジェクト活動拠点『M98』の整備や学生等が参加したまちづくり活動などが行われている。

8 調査から見えたこと、今思うこと

調査後の昭和 48（1973）年、中国新聞社のインタビューを受けた。「消え去る“原爆スラム”を照射」と題した記事になった¹⁵。そのなかで、街全体のある 1 日の住民の動きの記録を「模様が小さい黒点、大きい黒点の群として実に人間的な姿で描き出されている。（p5、図 17）夕涼み、ままごと、洗たく、立ち話、釣り、散歩、子守などの説明が愛情深く書き込まれている。」と紹介され、嬉しく思ったのをよく覚えている。

あれからおよそ 45 年、あの中学生も還暦を迎えようというほどの時が過ぎた。この間、時代は大きく変動し、バブル経済は崩壊し、2 度の大地震と原発事故を経験し、高齢社会を迎えて人びとの価値観は大きく変化した。ヒロシマも、そして基町も例外ではない。

1) ヒロシマの戦後史に位置づける

広島は平成 27（2015）年 8 月 6 日、被爆から 70 年を迎えた。思えば 70 年という年月はあの日からそのまま遡れば明治維新の時代となる。富国強兵・近代化を目指し日清・日露の戦争、第 1 次・2 次の大戦と続く加害と被害の極み、戦争の時代であった。そして昭和 20（1945）年 8 月 6 日である。

こうして始まった広島戦後史に、相生通りの街が存在したことの意味は大きい。それは相生通りの街が、被爆都市ヒロシマの爆心地近くに 30 数年にもわたって存在し続けたという事実のみにとどまらない。「不法占

扱」という負い目を背負い、悲惨な状況と様々な悪条件をしのぎながら、誰をも頼らず自力で自分たちの棲む家や街を作り上げていった人びとの生きざまの結晶として相生通りの街があった、という点にその大きな意味を求められよう。そこには原爆ドームや原爆資料館では補うことの出来ない、復興の時代を生きぬいた人びとと街の、生々しい戦後史の一面を如実に浮かび上がらせていたのである。

ヒロシマとその後に続く広島を背負って生き続けた基町／相生通り（通称「原爆スラム」）を、広島戦後史に正当に位置づけ、これからも相生（アイオイ）に多くを語らしめたいと願う。

2) 基町再開発の意味

「広島戦後を終わらせる」、「地区住民の福祉向上と新都市への志向を目標とする」願いのもとに、基町再開発事業がなされた事情は十分理解できよう。私たちは住宅地区改良事業による都市再開発を否定するものではない。むしろ困難多き事業にも拘らず、もたらした成果に賛辞を惜しむものではない。例えば、都心に近接して「本格的な住宅地」として、「住み続けられる再開発」としたことの英断は、結果として出来上がった空間に住む人々の立地評価として極めて高かった。

だが、住宅地区改良事業もオールマイティーではない。貧困・孤老問題・被爆後遺症・差別…は、そのまま新たな居住の地に持ち越されてはいないだろうか。再開発後も住み続けたいと思える街になっただろうか。そして持ち越された課題が現在の高層アパートで際立つ高齢化や多国籍化などで新たに生じた課題と重なり合っており、人々の生活の上になお重くのしかかっているとすれば、広島戦後の終わりはいまだ遠しの感がある。

3) 国際都市ヒロシマと基町のこれから

基町に伸びる平和の軸線

平和公園の慰霊碑から原爆ドームを結ぶ都市の軸線—平和の軸線¹⁶が、さらに北に伸びる地に基町は広がる。そこに高く折れ曲がって続く高層アパート群と中央公園が位置する。この軸上には広島史を象徴する幾多の土地利用の変遷があることは先に述べた¹⁷。

高層アパートが建設されて約半世紀がたち、中央の施設群には老朽・空き店舗が目立ち、広島市民球場は移転し跡地の利用が定まらないなど、今、基町一帯の新たな役割と再編が求められている。この先、平和の軸線を活かし目指すべき基町の姿をどう描くのか、平和・国際都市にふさわしいヒロシマ・基町の「ありたい姿」が議論されるべきであろう。歴史的な基町地区の土地利用の変遷と平和の軸線は、将来の基町のありたい姿をあぶり出してくれるのではないだろうか。少なくとも、かつて基町・相生通りに暮らした人々にとって、そこは安寧の街、希望の持てる基町になって欲しいと思わずにはいられない。

次世代への継承を

平成28（2016）年11月、高層アパート群の中にある基町小学校で基町のこれらを話し合う「基町シンポジウム」が開かれた¹⁸。参加していくつか印象に残ることがあったので以下に述べる。

①高齢化率が市内の約2倍のスピードで進む基町高層アパートにあって、若い人向けの公営住宅特別枠の設定など、行政側として課題に向き合う取り組みがなされていること、またこうした動きは官民双方にいくつもあるのでは、との思いを新たにされた。

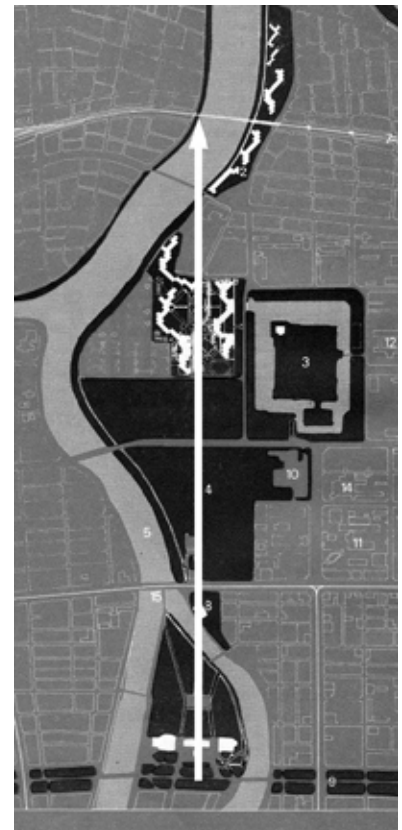


図21 平和の軸線

②戦後の混乱の中で確保された中央公園を、施設群で埋め尽くさずに災害時の避難・対応スペースを含めたフリースペースとして、大切な都市機能の一つとして確保すること（報告者の一人・藤本昌也氏）、都市の軸線設定・緑地確保の意味をそのように受け取りたい。

③シンポジウム後の懇親会で話題に出た基町相生通り（通称原爆スラム）の常設展示スペースを、小さな一室ではあっても基町の一角に設けられないだろうか。その際、図面関係だけではなく、そこでの人々の暮らし・日々の思いの一端を含めてあの街の実態を総合的に提示して、「消えた街」をそのまま忘れ去るのではなく、人の目に触れる状態にしておきたい。

④基町をふる里と呼び、被爆樹の現状に眼を向け、色彩豊かな模型（写真 7）をつくり報告した基町の子どもたち、その姿に未来はこのようなところに着実に根を張っているのだとうれしく思うとともに安心感も覚えた。

こうして基町・相生、さらにはヒロシマの過去をきちんと振り返りながら未来を見据え、できることから一つずつ実現するというのが大切なことだと思われる。

9 むすびに

昭和 52（1977）年 10 月、広島県は除却工事をすべて完了、翌 53（1978）年には広島市も同様に完了して、10 月 11 日、10 年間に及ぶ基町再開発事業の完成記念式が行われた。

それから 37 年を経た平成 27（2015）年 4 月、調査に関わった私たちは市史（被爆 70 年史）編纂の過程で再び会う機会を得た。そこで思いがけず 45 年前の実態調査、36 年前の追跡調査時の資料に再会した。約半世紀も前に行った様々な原票やアンケート、図書類に又会えるとは思っていなかった。本編の共同執筆者である石丸紀興（調査時は建築学科助手）が保存していたのだ。驚きと感動の瞬間であった。

幾度でも相生をして語らしめよう

私たちは、2 回にわたり調査をお願いした基町／相生通りの多くの人たちに、個人の調査記録は調査以外のものには使用しないことを断って調査の同意を得た。もちろん個々のプライバシーに関する記録は公表せざにきたが、調査の分析結果とそれが語る貴重な実態資料は、ひろく社会に公表する意味と価値があるものと判断し、記録として公表させてもらってきた。その結果、これまで社会に報告する機会をたくさんいただいた。

調査の 3 年後、建築系専門誌の『都市住宅』に集住体特集 7306「不法占拠」として採り上げられた¹⁹。これには基町高層アパート設計者の大高正人建築設計事務所の藤本昌也氏の推薦があった。この出版のおかげで、その後多くの人たちの目に触れることとなった。この本がなければ以降の機会は無かったかもしれない。遅きに過ぎるが、この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。

それから約 10 年後の昭和 55（1980）年に、基町相生通り居住者の追跡調査を日本建築学会で発表し、さらに昭和 58（1983）年には、広島市史編集委員会による『広島新史 都市文化編』の「第一部・都市の空間と文化」に「基町／相生通りの出現と消滅」、「基町高層住宅における空間と文化」として採り上げられた。それから約 30 年の時を経て、平成 24（2012）年、日本建築学会の機関誌「建築雑誌」が、前年の東日本大震災後に特集「広島 {ヒロシマ}・長崎 {ナガサキ}」を組み、「基町高層アパートと原爆スラム」²⁰を採り上げた。その前後には「原爆スラムとその関連諸問題」に関心を持った、大阪と東京の若い研究者たちが訪ねてきた。



写真 7 子どもたち製作の基町（被爆樹等）模型

地元広島でも、広島市立大学の研究者と学生らによる基町での活動が動き始めた。平成 29（2017）年 6 月には NHK 教育 TV で「原爆スラムと呼ばれた街で」が放送された²¹。そして今回である。こうした思いがけない動きと出会いに私たちはその都度感動し、記録の継承を心強く思った。

私たちは、基町／相生通り（通称「原爆スラム」）の存在と、それが訴えかけた意味を伝える機会があれば、幾度でも相生をして語らしめたいと思う。それが調査に協力してくれた基町／相生通りの多くの皆さんへの恩返しと思うからにはかならない。

最後に、私たちの 2 度の調査を支えてくれた友人たちに改めて感謝すると共に、こうした最新の報告機会を与えていただいた上に、私たちの膨大な調査記録の保存に尽力いただいた広島市公文書館の中川利國氏（前公文書館館長）とスタッフの方々に厚くお礼を申し上げ、結びとしたい。



写真 8 基町再開発事業終了時の三篠橋以南の基町地区（昭和 53 年 11 月撮影）
バラックは撤去され、河岸も整備されている。もと相生通りの住民の一部は、新たに建設された高層アパートに移り住んだ。

執筆者

石丸紀興：1940 年生まれ、岡山県井原市出身、東京大学大学院修士課程修了、広島大学大学院工学研究科教授を経て、現在、「㈱広島諸事・地域再生研究所」主宰、工学博士、技術士

千葉桂司：1945 年生まれ、広島県福山市出身、広島大学大学院工学研究科建築学専攻、日本住宅公団（現 UR 都市再生機構）を経て、現在「K まち工房」主宰、博士（工学）、技術士

矢野正和：1946 年生まれ、広島県東広島市出身、広島大学大学院工学研究科建築学専攻、広島市役所を経て、ハウスプラス中国住宅保証㈱勤務後退職。

山下和也：1957 年生まれ、島根県飯南町出身、広島大学工学部建築学科卒業、㈱地域計画工房、技術士

脚注

6 昭和 45 年の実態調査は千葉桂司、矢野正和、岩田悦次が、昭和 54 年の実態調査は山下和也が担当した。前編の脚注 3 では岩田悦次の実態調査年次を昭和 50 年としているが、45 年の誤りである。

- 7 広島市編『広島新史 都市文化編』(広島市、1983) 第Ⅱ章第 1 節の形成過程図 p114 および建築年代別・建物分布図 p122 を参照。
- 8 体育文化博覧会。昭和 26 (1951) 年 3 月 25 日から 2 か月間、広島城跡広場で開催された。
- 9 こうした戦後バラック建ての記述が、塩見鮮一郎著『戦後の貧民』2 關市の成立 (文藝春秋 2015) p36 にある。
- 10 広島市復興局は昭和 21 (1946) 年 1 月に発足。25 (1950) 年 4 月 30 日から建設局となる。
- 11 結果は昭和 55、56 (1980、81) 年に「基町再開発の追跡研究その 1～その 7」として『學術講演梗概集 計画系 55・56 (都市計画・建築経済・住宅問題)』(日本建築学会 1980～1981 年)、また、『広島新史 都市文化編』にも掲載されている。
- 12 広島市編『都市の復興』(広島市、1985)「人口復帰とバラック建築の増大」p55 参照。
- 13 詳細は『都市住宅 7306 号』p45～48、図 7 時間別行動調査図。「午後 4 時～4 時半、三篠橋付近の事例」大人と子どもの行動調査として 8 月末の 2 日間、午前 10 時・午後 2 時・午後 4 時・午後 8 時からの約 30 分間、街を歩いて記録したもの。
- 14 大藪寿一「原爆スラムの実態 上・下」『ソシオロジ』14 巻 3 号、15 巻 1 号 (社会学研究会、1968 年、1969 年) による。
- 15 『中国新聞』昭和 48 (1973) 年 7 月 10 日記事。
- 16 『都市の復興』丹下グループ案のパス・模型 p92 を参照。
- 17 前編 p1 の 2. 1 「原爆スラム」と呼ばれる街があった (原爆スラム略史) を参照。
- 18 平成 28 (2016) 年 11 月 12 日に開催されたシンポジウム「広島基町高層アパートと大高正人」(広島市立大学・広島市中区役所主催、文化庁共催)。パネルディスカッション登壇者は、石丸紀興・藤本昌也・小林礼幸 (司会: 松隈洋)
- 19 集落構造研究会編「特集『不法占拠』」『都市住宅』7306 号 (鹿島出版会、1973)
* 「集落構造研究会」は、千葉・矢野らがこの特集の編集のために設けた研究会である。
- 20 平成 24 (2012) 年、日本建築学会の機関紙『建築雑誌 2012/08』、特集「広島 (ヒロシマ)・長崎 (ナガサキ) 一建築家は広島にどう向き合ったか」
- 21 NHK 教育テレビ・ETV 特集「原爆スラムと呼ばれた街で」は、平成 29 (2017) 年 6 月 10 日午後 11～12 時、放送された。我々の昭和 45 (1970) 年、54 (1979) 年の調査を足掛かりに、相生通りの当時の居住者や家族を探し出し、被爆後の広島に片隅に暮らした人たちが、相生通りから基町高層アパートなどへ移り、その後をどう生き抜いてきたか、を追跡している。

参考文献

- 1 大藪寿一「原爆スラムの実態 上・下」『ソシオロジ』14 巻 3 号・15 巻 1 号、社会学研究会、1968 年・1969 年
- 2 集落構造研究会編「特集『不法占拠』」『都市住宅』7306 号、鹿島出版会、1973 年
- 3 広島市・大高建築設計事務所編、「特集『高層団地』」『都市住宅』7307、7308 号 鹿島出版会、1973 年
- 4 基町地区再開発促進協議会『基町地区再開発事業記念誌』広島県・広島市、1979 年
- 5 石丸紀興・千葉桂司・矢野正和ほか著「基町再開発の追跡研究 (1～6)・(その 7)」『學術講演梗概集 計画系 55・56 (都市計画・建築経済・住宅問題)』日本建築学会、1980・1981 年
- 6 広島市編・発行『広島新史 都市文化編』1983 年
- 7 広島市編・発行『広島被爆 40 年史 都市の復興』1985 年
- 8 「特集『広島 (ヒロシマ)・長崎 (ナガサキ)』」『建築雑誌』1635 号、日本建築学会、2012 年
- 9 仙波希望「平和都市概念の生成と“原爆スラム”クリアランス: 広島戦後復興期における広報・都市計画を検討主題として」(東京外国語大学大学院修士論文)、2015 年
- 10 塩見鮮一郎『戦後の貧民』(文春新書)、文芸春秋、2015 年
- 11 佐々木俊輔「ヒロシマシティアパート観光案内」『早稲田文学』2015 秋 (特集・広島について)、早稲田文学会、2015 年

絵・写真・地図出典

- 口絵 1 昭和 45 年実態調査の頃: 集落構造研究会撮影
- 写真 6 昭和 44 年 6 月: 広島市撮影
- 写真 7 子どもたち製作の基町 (被爆樹等) 模型: 矢野正和撮影
- 写真 8 昭和 53 年 11 月: 広島市撮影
- 図 14 『広島新史 都市文化編』第Ⅱ章都市の空間と文化 p115 相生通りの形成史 (地区北側、三篠橋南側) から転載
- 図 15 「特集『不法占拠』」『都市住宅』7306 号 p33 から転載
- 図 16 同著 p50 から転載
- 図 17 同著 p45 から転載
- 図 18 山下和也作成
- 図 19・20 同上
- 図 21 「特集『高層団地』」『都市住宅』7307 号目次 p4 をもとに筆者作成